途上国の農道補強紹介

京のNPO、土のう使い6年間活動

土のうを用いて農道を改良する住民（昨年夏、ケニア）＝NPO法人道普請人提供

発展途上国の農道を土のうで固める活動を進めるNPO法人「道普請人」（理事長・木村亮京都大教授）が、6年間の成果を紹介する展示会を中京区堺町通御池下ルの堺町画廊で開いている。簡単な作業で途上国の生活向上に寄与しており、NPOは「アイデア一つで住民が笑顔になることを見てほしい」と来場を呼び掛けている。

中京でパネル展示や映像

作物出荷、生活が改善

道普請人によると、途上国には舗装されない農道が多く、雨期に泥田化し四駆でさえ動けなくなるケースがあり、農作物出荷や救急車の出入りに支障があるという。

このため、生活改善に向け現地調達できる道具を使って土のうを埋め固めて農道を補強する支援を行っている。

現地で使われる土のうを踏み固める道具（京都市中京区）

活動はNPO設立翌年の2008年から本格化した。スタッフらが現地で住民を指導し、道を補強する。これまでケニアなどアフリカ中心に15カ国110キロの道を直してきた。

展覧会では、これまでの成果のほか、農道の中央に穴を掘ったり、土のうを固めたりする作業、アフリカの生活の様子をパネルや映像で伝える。農道補強後には出荷が容易になり、換金作物のコメを栽培して、子供に教育を受けさせられたウガンダの農家の声も紹介する。

また、効果も実感できるよう、使用する器具と土のうも置いている。

福林良典理事は「近代化が進む途上国の農村でも現金収入の必要性が高まっている。簡単な技術で道を整備するということだけで、生活自体が変わることを知ってほしい」としている。

29日まで。入場無料。午前11時～午後7時。同日午後3時から、NPO職員による現地活動報告会がある。

（立川真悟）